

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 5 月 11 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02873

研究課題名(和文) デジタルネイティブ世代「不読」留学生の「読む」活動を支援する教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of an educational program to support the "reading" activities of "non-reading" international students of the digital native generation

研究代表者

脇田 里子 (Wakita, Riko)

同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：20251978

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本語学習者が読書を習慣にし、成熟した読者になることを目的に、読書リテラシーを支援する日本語科目のプログラムを提案し、その実践を行った。本をあまり読まない留学生の特性に、読書技術の知識が少ないこと、本を仲間(ピア)と一緒に読む経験が少ないことなどが挙げられる。そこで、プログラムにおいてこれらを補い、高度情報化社会における本を読むことの意義を確認した。学習者は読書技術に関する複数の本(主に電子書籍)をピアと読みながら、読書の壁を低くする心構えや読書段階ごとの読書技術の要素について議論した。読後、書評や読書マップを作成し、クラス内で閲覧した。学習者は読書リテラシーに関する認識を新たにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

読書離れは日本人だけでなく、学部留学生にも見られる現象である。また、日本語教育の「リーディング」では「読解」が中心で、「読書」活動は極めて少ない。こうした状況の中で、本研究の研究成果の意義は、読書の習慣形成に着目し、熟達した読者を育成するために、次の5点を指摘したことである。1. 情報化社会における本からの情報収集の重要性、2. 読書の目的(情報収集、思考深化、娯楽)による読み方の違い、3. ノンフィクションを読む際の具体的な読書技術、4. 仲間(ピア)との協同学習による読書の面白さ、5. 理解を深めるための多様な「書き」(アウトプット)

研究成果の概要(英文)：The program of Japanese language courses that support reading literacy, with the purpose of assisting Japanese language learners in the humanities to get in the habit of reading books and become mature readers, will be examined in this study. Among the characteristics of international students who do not read many books are that they have little knowledge of reading skills and little experience in reading books with their peers. Therefore, I supplemented the program with these and confirmed the significance of reading books in an advanced information society. Learners read a few books on reading skills (mostly e-books) with peers, discussing the mindset of lowering reading barriers and the elements of reading skills before, during, and after reading. After reading, book reviews and reading maps were created and viewed in class. The learners renewed their awareness of reading literacy.

研究分野：日本語教育

キーワード：読書リテラシー 読書技術 電子書籍 読解 読書 協同学習

1. 研究開始当初の背景

昨今、活字離れや読書離れが叫ばれて久しい。2006年と2012年に大学生を対象にした読書調査によれば、1か月に本を1冊も「読まない」と回答した「不読者」は、2006年は33.6%、2012年には40.1%で、大学生においても読書離れが深刻な問題であることを示している(平山, 2015)。もちろん、こうした問題は日本人だけでなく、留学生にも共通して見られる現象と思われる。

例えば、日本語ライティング科目で、レポートのテーマを提示した時、受講生の中から「私はそのテーマについて知らないから、あるいは、意見がないから、レポートが書けない」という声が挙がることもある。そうした留学生は、日頃、本を読んでいない、そして、新聞や雑誌も読んでいないことが実に多い。大学入試に合格するだけの高い日本語運用能力を留学生が有していても、大学生活の中で、主体的に、そして、日常的に「読む」活動が行われていないようである。つまり、日本語による「読む」活動の多様な情報収集の習慣があまり身につけていないと言える。その結果、レポートは複数の先行研究を長く引用し、最後に留学生自身の意見を短く添えたレポートになりがちである。そして、レポートの引用文献はインターネット上からの文献が数多く、レポートは安易なコピーとペーストで占められることも多い。こうした不読者の抱える問題点を解決するために、「読む」活動を促す取り組みが必要だと考えている。

2. 研究の目的

21世紀を迎え、国内では大学生に問題解決能力を含む「学士力」(文科省)、考え抜く力を含む「社会人基礎力」(経産省)などが求められている。こうした力を身につけるためには、まず、自分の頭で考える力を養う必要がある。そのためには、考える材料となる情報を増やすしかない。「考える」行為は、自分の中にある情報(インプット)をもとに、自分なりの結論(アウトプット)を導く行為であり、質の高いアウトプットをするためには、インプットとしての「読む」活動が不可欠である。しかし、昨今、若者の活字離れや読書離れが叫ばれて久しく、これは留学生も例外ではない。

そこで、本研究はデジタルネイティブ世代の留学生、とりわけ、不読者の留学生に対する「読む」活動を支援する教育プログラムを開発することを目的とする。本研究は読み方のスキルアップを目的とした読解研究ではなく、大学生活の中で、留学生が主体的、かつ、日常的に「読む」ことを促進する方法を提案するものである。

本研究の独創的な点は従来の日本語教育ではあまり取り上げられなかった「読む」活動の習慣形成に着目した点である。日常的に「読み」、考える留学生の育成はグローバル社会に貢献するもので意義がある。

3. 研究の方法

- (1) 2017年度、留学生の「読む」活動を調査し、不読者の実態を把握する。
- (2) 2018年度、大学生の活字離れや読書離れの対策に関する先行研究を収集し、分析する。
- (3) 2019年度、不読者留学生の「読む」活動を支援する教育プログラムAを開発し、実践する。
- (4) 2020年度、不読者留学生の「読む」活動を支援する教育プログラムBを開発し、実践する。

4. 研究成果

(1) 留学生の「読む」活動に関する実態について、アンケート調査を実施した。2017年6月から7月にかけて、2つの大学の人文系学部留学生219名から回答を得た。その結果、1日の読書時間が0分の「不読者」の割合は、日本人学生の49.1%と比較し、本調査による留学生(25%)はその半分だった(全国大学生生活協同組合連合会, 2017)。学部留学生は日本人の読書離れよりは少ないものの、学部留学生の4人に一人は不読者であることがわかった。

さらに、2017年11月から12月にかけて、アンケート調査に協力した学部留学生25名に、読書に関するフォローアップ・インタビューを実施した。その結果、注目に値する点は、「何語の本を読んでいるのか」という問いに対し、68%の留学生が母語のみと回答したことである。日本語は16%で、日本語と母語は16%であった。約7割の留学生は母語のみで読書をしていた。また、日本語での読書が難しいと感じている留学生は84%であった。その要因は、漢字(読みと意味)や語彙(略語、若者ことばなど)の難しさ、縦書きの文章に対する不慣れ、文の構造(単語の省略、文が最後まで書かれていないなど)という回答に集約された。これらの調査結果をふまえ、学部留学生に対する日本語による読書活動の推進を検討した。

(2) 大学生の活字離れや読書離れの対策に関する先行研究の収集を中心に、学部留学生にとって日本語による読書の課題や読書活動を推進するための環境や支援について分析した。

読書離れの課題を解決するために、二つの仮説を立てた。一つは電子書籍をうまく活用し、個人の読みを支援することである。もう一つは読書を個人の趣味と考えるより、複数人で読み合い、意見交換する活動と考えることである。

前者については、印刷書籍と電子書籍の特徴を分析した。とりわけ、電子書籍の中でもAmazon社のKindle版は印刷書籍と同様の読書支援環境が提供されている。例えば、単語をクリックす

ると、複数の電子辞書との接続が可能で、漢字の読み、単語の意味などを瞬時に知ることができる。電子書籍はそうしたインターネット接続による長所がある。留学生のスマートホンの所有率はほぼ 100%であるため、スマートホンのアプリを使った電子書籍の読書を推進したい。

後者については、吉田(2019)で示されている「ブッククラブ」という環境が望ましいと考えた。そこで、授業中、ピアで同じ本を読み合い、毎週、意見を交換し、読後に簡単な書評を書く協同学習を試行した。授業時間全てを「ブッククラブ」活動に割り当てるのではなく、15 分程度の時間を意見交換した。

(3) 日本語リーディング科目(1年生の必修科目、春学期1コマ・秋学期1コマ、2クラス体制、受講生は春学期34名、秋学期31名)において、教科書を用いた読解の他に、読書活動推進を目的とした教育プログラムA「新書プロジェクト」を実施した。

このプロジェクトは、春学期に1冊、秋学期に2冊の新書をピアで読み合うものである。新書3冊の選書について、春学期と秋学期の各1冊は教員が作成した推薦新書の中から選び、秋学期の残り1冊は学習者が選んだ。毎週、授業外で、学習者は新書を30ページ前後読み、内容について、読書シートにまとめた。学習者は授業時間の約15分、読んだ内容についてピアで話し合った。1冊を読み終えた後、その書評を作成した。教員の役割は、推薦新書のリスト作成、学習者が毎週、書き込む読書シートの作成と提出管理、書評集作成である。学習者同士のピア活動の内容に教員は基本的に介入しなかった。授業外に、日本人学生の読書サークルとの交流イベントを1回、実施した。

実践の結果についてアンケート調査の結果から述べる。実践前、ピア・リーディングの経験がない学習者が87%を占め、日本語の本1冊を読んだ経験のない学習者は62%であった。実践後、ピア・リーディングの活動がうまくいったと回答した学習者は70%で、日本語で書かれた本1冊を読んで、達成感を感じた学習者も70%であった。電子書籍の利用は、秋学期の2冊のうち、2冊とも電子書籍による読書は30%、1冊のみは47%であった。電子書籍の利用者の65%がスマートホンによる読書で、文字が小さい、目が疲れるなどの否定的意見の方が多かった。自由記述コメントにおいて、7割近い学習者が肯定的な回答をしていることから、ピア活動を通じた読書活動は概ね成功していると思われる。しかし、3割近い学習者はピアによる読書活動が活性化されなかったため、その原因を分析し、プログラムの改善を行った。

(4) 日本語リーディング科目(1年生の必修科目、春学期1コマ・秋学期1コマ、2クラス体制、受講生は春・秋学期ともに28名)において、教育プログラムB「読書プロジェクト」を実施した。前年度の実践との大きな違いは、読解の教科書を扱わず、日本語による読書のみ集中したことである。このプロジェクトにおいて、春学期と秋学期に、3冊ずつ新書などを読んだ。学習者は読書リテラシーを学んでいないため、春学期に、2冊の読書技術論を読み、読書の意義や体的な読書技術について議論した。春学期はその他に1冊の日本語学、秋学期は3冊の日本文化論を読んだ。授業で取り上げる本の選書方針は、学習者が関心をもちそうなテーマで、電子書籍(Amazon社のKindle版)で購入できるものである。読書のペースは、1週間に30~50ページで、読書の定義「読み手の目的を達成するために、テキストを理解、解釈し、読み手の知識や経験から価値判断し、活用すること」に基づき、予習課題(内容理解問題と読書ノート)を設定した。授業では、予習課題についてピア活動による協同学習とクラス全体で確認し、理解を深めた。学習者は1冊読み終わるごとに、書評と読書マップを作成した。教員はそれを講義ページに掲載し、学習者が閲覧可能にした。

実践の結果についてアンケート調査の結果から述べる。事前アンケートでは、日本語で書かれた本を読むことが「難しい」、「やや難しい」と感じていた学習者は74%であったが、事後アンケートでは43%に減少した。電子書籍の利用は本によって異なるが、全体の50~80%が利用した。電子書籍の閲覧方法(複数回答可)は、タブレット52%、ノートPC44%、スマートホン33%であった。前年度と比べ、スマートホンの利用が低下し、電子書籍による読書に対する否定的なコメントは減少した。そして、協同学習を楽しんでいる学習者は93%、協同学習を通じて多面的思考ができたと判断している学習者は89%であった。また、最初に読んだ読書技術論に書かれていた読書技術をその後の読書に利用した学習者も81%と肯定的な回答が多かった。1年間の読書プログラムを通じて、読書リテラシーが習得できつつあると言えよう。今後、このプログラムを継続しつつ、学部4年間にわたるカリキュラムの中で読書教育プログラムを検討したい。

参考文献

全国大学生生活協同組合連合会(2017)『第53回学生生活実態調査の概要報告』(2021年5月10日閲覧 <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report53.html>)

平山祐一郎(2015)「大学生の読書の変化:2006年調査と2012年調査の比較より」『読書科学』第56巻,第2号,pp.55-64.

吉田新一郎(2019)『改訂増補版 読書がさらに楽しくなるブッククラブ』新評論

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 脇田里子	4. 巻 12
2. 論文標題 本をどう読むか 読書術を知り、熟達した人を目指す	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	6. 最初と最後の頁 63-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 脇田里子	4. 巻 15
2. 論文標題 読書リテラシーを支援する 日本語科目のカリキュラム・デザイン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 間谷論集	6. 最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 脇田里子
2. 発表標題 初年次の日本語科目における読書教育
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 脇田里子
2. 発表標題 学部留学生を対象にしたアウトプット指向の読書教育
3. 学会等名 第26回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 脇田里子
2. 発表標題 学部留学生の日本語による読書の課題
3. 学会等名 第25回大学教育研究フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 脇田里子
2. 発表標題 電子書籍による読書活動推進
3. 学会等名 第47回アカデミック・ジャパニーズ・グループ定例研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 脇田里子・村上康代
2. 発表標題 学部留学生の読書活動に関する調査報告
3. 学会等名 日本語教育方法研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------